日本ルイ・アームストロング協会

ワンダフルワールド通信 No.94

WJF（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション＝WJF） 2017 年 5 月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ http://wjf4464.la.coocan.jp/
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

記念特集号

ODJB－世界初のジャズレコード発売から100年
ニューオリンズとサッチモのジャズへの大きな貢献を考える
7月～9月、アテネフランセでは新シリーズ・ジャズ講座も開催

1917 年 4 月、ニューオリンズの白人 5 人からなるオリジナル・デキシーランド“ジャス”バンド（ODJB）のレコードが発売され大ヒットした。一説には 100 万枚が売れたという。JASS、JASZ、JAZ、JAZZ、、、、、当時色々に呼ばれていた“新音楽”ジャズ。ニューオリンズの黒人スラムで生まれた新音楽は、このヒットをきっかけに全国、全世界に野火のように燃え広がり、時代はすっかり“ジャズエイジ”となっていく。

黒人のスラムに始まった新音楽に、白人が洗練された感覚を加え大きなマーケットでのヒットに結びつける。1917 年の ODJB のヒットから 20 年後には、スウィングの王様、白人ベニー・グッドマンが大スターとなり、1950 年代ロックンロールの王様、エルビス・プレスリーが登場、このパターンは現代まで繰り返されているのかもしれない。

大天才ルイ・アームストロングが活躍を始めたのは初ジャズレコードの誕生と同じ頃。多くの白人黒人のジャズの巨人たちがルイの影響を受け、ジャズは20世紀を代表する音楽として大きな飛躍を遂げる。ジャズレコード100年の歴史は、白人黒人共に大きな役割を果たしながら、ニューオリンズのジャズを、手をたずさえて世界の音楽に育てきた歴史とも言える。今回はそんな歴史を振り返った臨時発行の記念特集号としました。（外山喜雄）

サッチモと、ODJBとラグの楽譜の表紙2種

ジャズレコード100年記念特別シリーズ例会 **第1回『ラグタイムからJASS誕生まで』**

7月1日（土） 午後2時開演 懐かしのお茶の水・アテネフランセ文化センターで開催。

“ジャズのもと”となったラグタイムブームに、ニューオリンズの黒人のスウィング感が加わり、ジャズが誕生するまでをゲストミュージシャン、ゲストトーカーのお話を交えてたどります。 **シリーズ例会、皆様のご支援お願いいたします。**

第 2 回 8月5日（土）1 時半開演 「この素晴らしき世界」録音から50年 サッチモ超レアー映像特集

今年は、サッチモの『この素晴らしき世界』の録音から 50 年。これを記念しサッチモの超レアーな希少映像を特集。 2000 円

ゲスト：ジャズ評論家瀬川昌久さん、ジャズ喫茶イーグル店主後藤雅洋さん、元日本レコード協会会長佐藤修さん

第 3 回 9月30日（土） 1 時半開演 「サッチモのジャズ事始め」

サッチモは 1923 年から亡くなるまで 50 年近く世界的レコーディング・アーチストとして活躍。そして没後約 50 年サッチモのレコードは今も変わらず世界中で愛され続けています。 生演奏でたどるサッチモの軌跡とジャズレコード 100 年への貢献 3000 円

1917年2月26日、NYで録音、78回転SP盤裏表2曲をビクターから発売

JASSバンドって何？　狂ったブラスバンドさ！

「デキシーランドJASSバンド・ワンステップ」と「馬小屋のブルース」

ビクターは当時『…話す機械会社』バンドはニューオリンズ白人5人組

初のジャズレコードとなったのは、1917年2月26日にNYで録音され、ビクターから発売された78回転SP盤裏表2曲の「デキシーランド“JASS” バンド・ワンステップ」と「馬小屋のブルース」。ビクターの社名が当時『ビクター・トーキングマシン・カンパニー＝ビクター話す機械会社』だったのが、いかにも時代を感じさせる！バンドはニューオリンズの白人5人組、ニック・ラロッカ（コルネット）、ラリー・シールズ（クラリネット）、エディー・エドワーズ（トロンボーン）、ヘンリー・ラガス（ピアノ）、トニー・スバーバロ（ドラム）。「デキシー・ジャスバンド・ワンステップ」ではトロンボーンのパワフルなグリッサンド、「馬小屋のブルース（リバリー・ステイブル・ブルース）」では、クラリネットがコケコッコーと鳴き、コルネットが馬のいななき、トロンボーンが牛の鳴き声と言った冗談音楽的要素があふれている。今でもデキシーランド・バンドとか、デキシーランド・スタイルという言葉が残っているのはこのバンドの影響だ。

ニューオリンズで見つけたタイムズペキューン紙1917年5月11日付けのいかにも楽しそうなODJBの初ジャズレコードの広告

私たちニューオリンズでの武者修行時代、市立図書館で閲覧できた昔の新聞にこの初ジャズレコードの広告を見つけた。1917年5月11日付の新聞に老舗楽器店ワーラインが載せた宣伝。当時レコードは楽器屋さんが売っていたんだ、と妙なことに感心した（笑い）。

こんな宣伝文がついている。＜『JASSバンドって何？』と聞かれたら…「A Brass Band Gone Crazy― 狂ったブラスバンド」…とお答えしましょう。ダンスをするならもっともっと踊りたくなる！バンドの絵は楽しい音が飛び出しそう。このバンドの『整然たる騒音』を聞いてください。『凶暴な音』が『チャーミングに』心に突き刺さる！＞

いかにも楽しそう！　アメリカ津々浦々の地方新聞にこの広告は掲載され、レコードはよく売れたに違いない。

新聞の宣伝コピーには早くも『スウィングする音楽です』と

また別の新聞の宣伝コピーには、この音楽は『スウィングする音楽です』と入っていたのも面白い。20年後にスウィングという言葉は知らぬものがいないほど有名になるが、初レコードからスウィングという言葉が使われていたのだ。

この音楽はいったいどこから来たのだ?!1910年頃から各地の新聞の話題に
もともとスラム街の教会やジャズ葬式、パレードから生まれた

ボードビルやサーカス巡業で各地にフレディー・ケパードも旅回り先駆者

ジャズは、もともとスラム街の教会や通りをゆくジャズ葬式やパレードから生まれたスウィングする黒人の音楽として誕生した。1900年頃にポピュラーになったラグタイムを、初代ジャズ王と伝説に残るバディー・ボールデンがラッパで荒々しくスウィングさせたのが始まりと言われる。新音楽にヒントを得て白人たちのバンドも生まれ、1910年頃になると黒人白人ともバンドがアメリカ各地に進出。間もなく、それまで聞いたことものない、聞いているだけで踊りだしたくなる音楽は、アメリカのあちこちで話題になっていく。ボールデンにつづく2代目ジャズ王と言われる黒人コルネット奏者、フレディー・ケパードは、1911年オリジナル・クレオール・オーケストラと共にそうした旅回りを始めた先駆者だ。彼は巡業中、新聞記事がでると、当時まだ子供で、後にソプラノサックスの名手となったシドニー・ベッシェに新聞の切り抜きを送っていた。「最近耳にするこの新音楽、、、この音楽はいったいどこから来たのだ！！！？？」がアメリカ各地で大きな話題だったのだ。白人のバンドもジャズを広め始め、1916年にはステインのデキシー・「ジャス」・バンドがシカゴで人気となった。初レコードを出すチャンスに恵まれたODJBは、このシカゴのバンドが解散後、リーダーのステインを除くメンバーがNYに移り結成された。

フレディー・ケパード（後列左から２人目）が入ったオリジナル・クレオール・オーケストラ

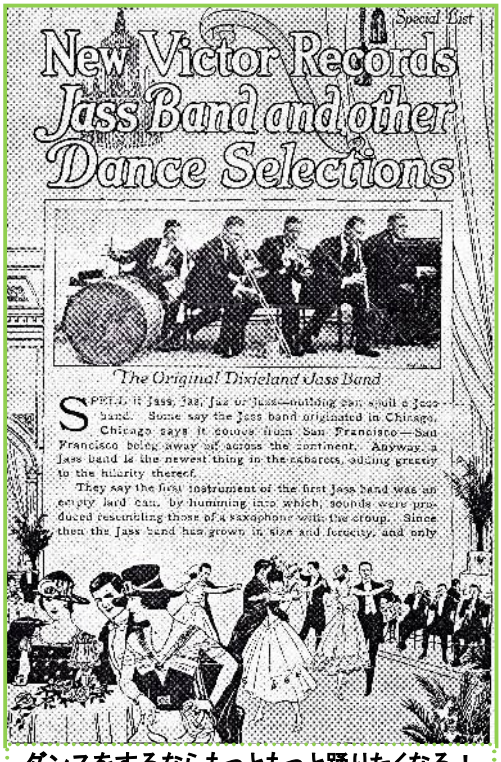
新しい『JASS感覚』はニューオリンズが生み出した荒けずりな黒人感覚
薄味の『おいしい』メロディーを創り出したODJBの功績と限界

マネージメントもスマートなODJB大きな白人マーケットも持っていた

新しい『JASS感覚』は、もともとはアメリカの中でもニューオリンズだけが生み出したもの。でも、時として『味の濃すぎる料理』、ダイヤの原石状態だった。白人はその濃すぎる味を適度に味覚にし、曲作りでも薄味の『おいしい』メロディーを創り出す能力に優れていると思う。マネージメントもスマートだし、桁違いに大きな白人マーケットをもっていること

も白人は有利だ。そして人種差別、、、ODJBの新聞広告には白人バンドの画が掲載された。当時黒人バンドの画が掲載されることはまずありえないことだし、大ヒットすることなどとても不可能だったことだろう。

ODJBが当時吹き込んだ曲を並べると、その後のデキシーランド・ジャズの名曲となり、残った曲が多いのに驚く。タイガーラグ、デキシーランド・ワンステップ、クラリネット・マーマレード、フィジティー・フィート、アット・ザ・ジャズバンド・ボール、スケルトン・ジャングル、オストリッチ・ウォーク、インディアナ等々。インディアナを除きすべてがリーダーでコルネット奏者、ニック・ラロッカの書いた曲だ。ベニー・グッドマンや白人の伝説的コルネット奏者ビックス・バイダーベック、その他初期のジャズスター達はこのバンドのレコードに大きく影響を受け、彼等白人ジャズのスタイルはODJBのジャズをスマートに自由にした感がある。ODJBの演奏を残念ながらジャズと呼ぶかは微妙なところだ。各コーラスは毎回譜面に書いたような同じフレーズが各楽器とも繰り返され、ジャズのスウィング感も少々違和感があるが、確かにジャズの走りとして、それまでのどの音楽にもない魅力にもあふれている。難しいところだ。



ダンスをするならもっともっと踊りたくなる！
バンドの絵は楽しい音が飛び出しそう

「彼らの曲」は名曲として残ったが…「ジャズ演奏者」としては忘れ去られた

結果だが、『彼らの曲』は名曲として残ったが『ジャズ演奏者』としては1920年代半ばには忘れ去られ、メンバーの一人として後のジャズシーンで活躍することはなかった。彼らの音楽は大ヒット後、5年ですでに時代遅れとなっていったが、ジャズとは別の意味でODJBの演奏の見事さは、目を見張る素晴らしいものがある。各演奏者の楽器のマスター度、曲作りの見事さ、商業的にヒットする要素等々、白人の洗練された感覚が100年の時を経ても78回転のレコードの溝から伝わってきて感心する。こうした要素は、その後20年代、30年代、40年代の優雅な白人ジャズにも共通した特徴だ。白人の手によって黒人音楽が素敵な商品となり、厳密にはジャズではなかったにせよ、彼らのヒットがJASSブームを引き起こし、後のジャズの大きな発展に大貢献をしたことは間違いのない事実だと思う。

黒いものに魅かれる白い社会アメリカ ジャズに夢中になったグッドマン少年

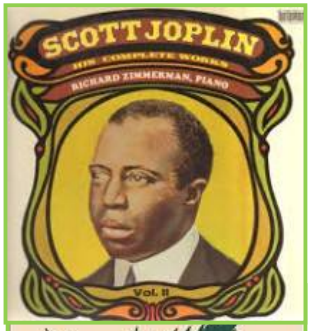
スウィング感は現代までジャズの楽しさのもとだし、1920年代、30年代、40年代の黄金時代、ジャズはダンスと結びついて大ヒットした。1920年代の伝説の白人コルネット奏者ビックス・バイダーベックや後に大スターとなるベニー・グッドマンは少年時代ODJBのレ

コードとあわせて吹いてジャズを覚えた。映画ベニー・グッドマン物語（**写真右**）にも、ベニーがこのバンドのジャズに夢中になり先生に怒られる場面が出てきたのを想い出す。当時JASSは低俗かつ悪魔的、売春宿の音楽として目の敵にもされた。そうした『毒の魅力』のある新音楽はかえって魅力いっぱいで瞬く間に世界中に広まったのかもしれない。

厳しい人種差別があったというのに、時代を問わず白人社会が黒人的なものに魅かれる傾向があったことは興味深い。1850年頃、南部の黒人のメロディーを取り入れたフォスターメロディーの流行にもその走りがあるのかもしれない。1920年代の中ごろにはセレブな白人階級が「スラミングと称して」スラム街の黒人酒場に出入りし、黒人の音楽、黒人のセンスをまねることが『ヒップ』で先端であるという価値観も生まれている。1900年代のラグタイム、10年代のブルース、20年代のジャズ、30年代のスウィング、50年代のロックンロール、そして現代の日本語でラップをやる若者にまで,100年以上たった今も“黒人的なもの”が“ヒップ”なトレンドとして変わらず生きているという事かもしれない。

東京ディズニーランドに流れるラグタイム、1900年頃のアメリカがモデル
大ヒットとなったスコット・ジョプリンの「メイプルリーフ・ラグ」

7月1日にアテネ・フランセ開催の第61回例会では、ラグタイムからJASS誕生までの時代がテーマ。ニューオリンズの先駆者たちの手によって、ジャズのスウィングが生まれた背景に思いを寄せます。



例会で演奏される古色豊かなラグタイムは、この上なく牧歌的な音楽だ！　東京ディズニーランドの目抜き通り、ワールドバザールでは一日中この音楽が鳴っている。ランドは1900年頃のアメリカがモデルなのだ。ジャズ誕生当時のニューオリンズを想像するには、東京ディズニーランドを頭に描きその一角に強烈なビートを持ったアフリカ色の強い黒人たちが住んでいる、と考えれば良い。

ニューオリンズにジャズが生まれたのは1900年頃。その頃全米を魅了していた音楽のブームがあった。ラグタイム・ブームだ。フォスターの曲に聞かれるような南部のプランテーションの黒人的メロディーに強いシンコペーションを加えたピアノスタイル。リズム(タイム)がRAGGED－ボロボロの音楽と言う意味でラグタイムと呼ばれた。よく昔の西部劇で酒場のピアニストが場末感たっぷり演奏していた。あのスタイルの延長がラグタイム。大ヒットとなったのはテキサス州出身の黒人ピアニスト、ス

コット・ジョプリンの「メイプルリーフ・ラグ」**（前頁写真下中央の2枚）**。1899年に譜面が発売され、当時酒場に普及していた自動ピアノもヒットに大きく貢献した。もともとピアノ音楽だったラグタイムだが、バンド用のアレンジも普及して、1911年にはアービング・バーリンのアレキサンダーズ・ラグタイム・バンドという曲が生まれるほど全米に流行した。

黒人的なメロディーの流行としては1910年代、W.C.ハンディーが南部黒人の間でうたわれたブルースを集め出版し大ヒット、ブルース・ブームが誕生している。

バディー・ボールデン（後列右から2番目）**のバンド＝**1905年頃（ギタリストとベーシストは左利きで、よく裏焼の写真と間違われる）

ラグタイムのリズムは、シンコペーションが多く『ジャズの素』と言う事はできるかもしれないが、ジャズかと問われるとノーである。ラグタイムのジャズに変わる決定的な影響を与えたのがジェリーロール・モートン等のニューオリンズの先駆者たちだ。新しく加わったのはスウィングする感覚だ。その感覚をモートンはバディー・ボールデンが始めたと言っている。

ラグタイムにスウィング加味させた初代ジャズ王バディー・ボールデン

初代ジャズ王、ニューオリンズで初めてジャズを吹いたと伝説的に語られるのが、コルネット奏者バディー・ボールデン**（写真右上）**。1877生まれ！　1900年頃頭角を現し、当時流行りのラグタイムをアフリカ的感覚でスウィングさせ、ニューオリンズ一の伝説的人気者になった。

譜面が読めず、隣の公園で演奏するラグタイムバンドの曲を聞き覚えで強烈なリズムで演奏し人気を拍したのだ。聞き覚えで間違って覚えてしまうので、メロディーが変化していく。でも、持ち前の音感の良さで和音からは外れない。ちょっとメロディーを変えることを、フェイク（ごまかし）と言うが、ジャズのアドリブはこんなところから始まったのだ。

ニューオリンズの貴重なジャズ資料を集めているチュレーン大学のジャズ資料室には、その当時の膨大な資料が残っていた。ボールデンが聞いて真似をしたという‘隣の公園’で演奏していたバンド、ジョン・ロビショー楽団が使っていた譜面。クラリネットのソロが有名なジャズの代表曲ハイ・ソサイティーは、マーチのピッコロパートをクラで演奏してすっかり有名になったとの逸話がある。ロビショーの譜面に、1901年の編曲をピッコロに手書きで書きうつした譜面が残っていた！！　1968年、ニューオリンズの武者修行時代にこの譜面に興味を持ち、特別に許可をもらってかなりのコピーをさせてもらった。バイオリンも入った7,8人編成、1900年当時ピアノ譜と同時に発売されたバンド用の編曲を、7月1日の例会で再現する。**（11面に関連記事）**

川上アップタウンと川下ダウンタウン アフリカの血が濃い黒人とクレオール

ニューオリンズには奴隷解放以前から、農園主との混血で自由な身分を獲得したクレオールと呼ばれる黒人たちが多かった。彼らはミシシッピー河に沿ってできた街ニューオリンズの川下側ダウンタウンに住み、ダウンタウン・クレオールと呼ばれる。肌の色が薄く、社会的地位も高く独特の混血文化を創り出していた上流黒人だ。音楽が得意で譜面も読めたクレオールはラグタイムやマーチを優雅に演奏していた。

ジョン・ロビショー・オーケストラ（これらのクレオール・ミュージシャン達がラグタイムを演奏していた。このバンドの譜面を例会で再現。

一方、川上側アップタウンには、アフリカの血が濃くて肌の色も真っ黒な人々が住み、強烈なスウィング感を持ったアフリカ的な音楽とリズムがアップタウンにはあふれていた。もちろん譜面は読めない。強烈なリズムと鋭い音感に満ちた人々。今でもこのアフリカの強烈なリズム溢れる光景は、ジャズ祭やジャズ葬式のパレードで目にすることが出来る！

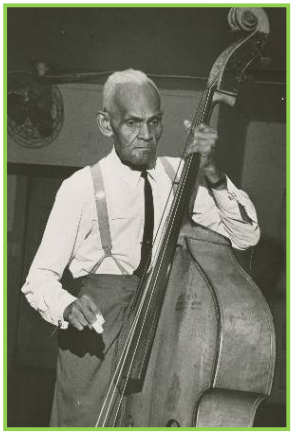
フランス人やスペイン人の血をひき優雅な地位にあったクレオールには、奴隷解放後、逆に“白”ではなく“黒”と言う色分けをされ、アフリカ色の濃い黒人と同じ扱いをされていった。こうしてニューオリンズの黒人の間にあった2つのクラスが壊れ、ニューオリンズだけにしかない、独特のジャズ感覚が形作られることになった。ラグタイム、行進曲、流行り歌等様々な音楽に、アフリカ的なスウィング感とブルーな音感覚がブルースやゴスペルの要素となって入り込んだ。こうして生まれたのが、1900年頃にジャズ王キング・ボールデンと呼ばれるまでになったバディー・ボールデンだ。強烈なプレイが有名で1906年頃まで活躍したが、精神に異常をきたし引退、1931年精神病院で亡くなった。ボールデンが演奏したと伝えられる曲が何曲かある。当時流行っていたラグタイム、セントルイス・ティックルのメロディーを聞き覚えで演奏した曲は、ファンキーバット（お尻がくさい）と言う名で子供たちまでが口ずさんだほど有名となり、後の世に語り継がれた。ボールデンが演奏したファンキーバット・ホールのすぐ裏に住んでいたルイ・アームストロングは、ボールデンのバンドをよく聴いていたという。5，6歳だったが、音楽がわかるませた耳をしていたルイは「ちょっと荒っぽい演奏だった。キング・オリバーやバンク・ジョンソンの方が自分は影響を受けた」と想い出を語っている。ボールデンが始めたジャズ感覚やスウィング感は、ニューオリンズのパイオニア達の血を通じて確実にルイに伝わっている。

バディー・ボールデン、パパ・ジョン・ジョセフ、キッド・トーマス、キング・ケパード、キッド・オリー… ニューオリンズが生んだジャズ先駆者たち

ボールデン家は現在もアップタウンに 数軒先にはパパ・ジョンの床屋さんも

バディー・ボールデンの家は現在もニューオリンズのアップタウンに残っている。床屋さんだったとか、ゴシップ新聞とかを出していた等伝説が多いが、事実は違うようだ。１９６３年ジョージ・ルイス楽団が来日、ニューオリンズ生粋の音楽の初来日に日本のジャズファンは大きな衝撃をうけた。来日したベース奏者、パパ・ジョン・ジョセフ**（写真右下）**は当時88歳。1877年生まれでボールデンと同い年！！正にジャズ伝説が来日したわけだが、パパ・ジョンの家はボールデンの家から数件先の角にあり床屋さんをやっていた。こんなことから、ボールデンが床屋と言う伝説が生まれたのかもしれない。

2309ファースト・ストリートにボールデンの家は現存している
（2000年、同家の前でジャズツアーと記念撮影）



ボールデンのラッパは何しろニューオリンズでは大変な人気で、そのスウィング感は荒削りで未完成だったが、街中が夢中になったという。音の大きさは伝説的で、演奏がミシシッピー河を超えて対岸にも聞こえてきたという。

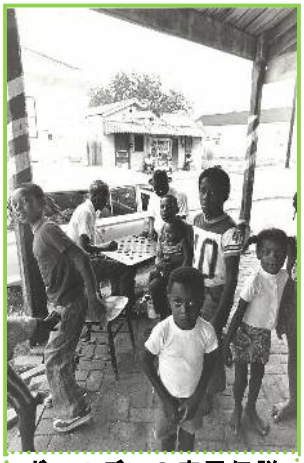
ジャズ修業時代の私たちもしびれた！ ボールデンの再来！?キッド・トーマス

私達がニューオリンズに暮らした頃、楽譜が読めない、また字も書けない、しかし素晴らしい強烈なスウィング感を持ったトランペッターがいて、毎晩その演奏にしびれたものだ。荒削りで未完成、、、と言ったところもボールデンの再来だったのでは、、、と思う。

1965年にジョージ・ルイスと来日したこともあるキッド・トーマスだ。１９６８年から73年まで、プリザベーション・ホールには、サッチモより年上のプレイヤーが何人も毎晩出演していた。トーマス（1896年生まれ）、ジム・ロビンソン（1892年同）、パンチ・

バディー・ボールデンを思わせるプレイのキッド・トーマス（右後ろは外山恵子＝プリザベーション・ホールで）

ミラー（1894年同）、エディー・ドーソン（1884年同）。こうしたジャズのパイオニアたちの演奏に毎晩、5年間触れた経験から、ボールデンからフレディー・ケパード、キング・オリバー、そしてルイ・アームストロングによって完成されたジャズのスウィング感の系譜を、同じくニューオリンズで触れたアフリカ的なビートと感覚と共に、ジャズ100年の歴史の中に感じている。スウィングしなけりゃ意味が無い、、、、とエリントンは言ったが、やはりニューオリンズに初めて生まれたスウィング感が、世界を虜にした、、、そうした事実を実感として感じている。



ボールデンの床屋伝説を裏付けるような近所のパパ・ジョンの床屋さん

初ジャズレコード録音の機会を断った2代目黒人ジャズ王、キング・ケパード

初ジャズレコード誕生の栄誉は白人バンドODJBのものとなったが、その前にレコードを出す話を持ちかけられ、断ってしまった黒人がいた話は有名だ。キング・ケパードその人。1900年頃、ニューオリンズで初めてジャズを吹いて人気者となり、王様、キング・ボールデンと呼ばれた伝説のラッパ吹きバディー・ボールデンが1907年に発狂し精神病院に引退した後、2代目の王様と呼ばれたキング・ケパードこと、フレディー・ケパードにチャンスがあった。ODJBの前にレコーディングを持ち掛けられたケパードは、「レコードなんて作ったら、オレのスタイルを盗まれてしまう」と断り、栄光のチャンスを逃してしまったという。ケパードは、ラッパの指使いが分らないように指をハンカチでかくして演奏したという逸話が残っているほど懐疑心が強かったとも言われる。最近分かった事実として、ODJBがNYで録音をした一週間後の1917年3月、ケパードの入ったバンドがNYのレストランに出演する新聞広告が発見されているところから、ケパードにも録音の話があったというのは、かなり信憑性のある話だ。

1917年3月、ODJB録音と同じ週、ニューヨークに主演したキング・ケパーのド広告

ラグタイムをジャズにしてレコードにキッド・オリーらボールデンと同世代

1885年に生まれたキッド・オリーは、ボールデンと年齢的に8歳しか違わない。キッド・オリーのような初期のニューオリンズジャズバンドは、ラグタイムをジャズにした演奏を沢山残している。1910年代にオリーが書いたと言われ

1905年のキッド・オリー（左から2人目）**のバンド**

る、オリーズ・クレオール・トロンボーンも、ラグタイムの形式を良く残した名曲だ。キッド・オリー楽団のトランペッター、マット・キャリー（1891年生まれ）の演奏には、バディー・ボールデンを偲ばせるようなサウンドがある。またマットのスタイルは、ODJBのリーダー、コルネット奏者ニック・ラロッカにも非常に似たところがある。ラロッカが影響を受けていることが想像される。

「私達が演奏する音楽は、昔ラグタイムと呼ばれていたんです」とサッチモは自著伝で書いている。ジョージ・ルイスも1950年代、彼のバンド名をジョージ・ルイス・ラグタイム・バンドと呼んでいた。

バディー・ボールデンとともに始まったジャズ化したラグタイムの伝統は、サッチモを通じて、その後のジャズに大きな影響を与えているのだ。

ジャズがレコーディングされて100年…に寄せて
宮沢賢治にも詩「岩手軽便鉄道 7月ジャズ」

——特別寄稿：ジャズミーブルース ノラ 佐々木孝夫さん

当時のジャズの面影を伝える ルイやビリー・ホリディの映画

蓄音器がエジソンによって発明されたのが1877年。エジソンの依頼によって1889年にブラームス自身のピアノ演奏が史上初めて録音されている。ジャズの分野で初めてレコーディングされたのが、今から100年前の1917年の事である。それも黒人のジャズではなく、ニューオリンズで結成された白人のディキシーランドジャズのバンド、**オリジナル・ディキシーランド・ジャズ・バンド**である。

当時のジャズの状況について、ルイ・アームストロングやビリー・ホリディが主演している1947年の映画「ニューオリンズ」**（写真右）**によく描かれている。

舞台は1917年のニューオリンズ。ルイ・アームストロングのバンドは、船着き場や酒場では人気があったが、白人の上流階級にとっては下品な音楽として蔑まれていた。クラシック歌手を目指していた上流階級の娘がニューオリンズに帰省した。そこでメイド（ビリー・ホリディ）が口ずさむ歌を聞いて感動し、ルイが演奏している店に連れて行ってもらうというシーンがある。この時代、ジャズは白人層にはまだ受け入れられていなかった。また、1914年に始まった第1次世界大戦に米国も参戦し、ニューオリンズが軍港となり、ストリーヴィルに代表される歓楽街（売春宿）が、兵隊に性病などが蔓延することを防止する目的で閉鎖され、そこで働く人々、演奏していたバンドメンが失業し、街を出てゆくというシーンも描かれている。カンザスシティやシカゴへと向かったのだ。事実、この時代ルイ・アームストロングもシカゴへと活動の場を移している。

当時はジャズ以外の音楽録音も多数 「遥かなティペラリー」は大ヒットした

また、こんな点にも注目したい。「ジャズ」としてのレコーディングは1917年が初ということになっているが、「ジャズ」以外の音楽の録音は多数行われていた。1914年ごろから大ヒットしたマーチ風の曲「It's A Long Way to Tipperary」（遥かなティペラリー）は、第1次世界大戦のさなか大ヒットしたが、日本でも1917年に浅草オペラ「女軍出征」で使用され「チッペラリー」として知られるようになった。

宮沢賢治の童話「フランドン農学校の豚」でもこの曲の名前が出てくる。賢治は農学校の教諭時代に学生たちにこの歌を英語で歌わせていた記録もある。日本にもさまざまな欧米の音楽がSP盤として入っていたということである。

日本では「私の青空」「アラビアの唄」ヒット以来、洋楽カヴァー曲をジャズ！

日本製のSP盤は、1913年に両面録音のものが登場するが、一方で輸入盤は関東大震災からの財政建直しの目的で高い関税がかけられ高嶺の花となった。しかし、1924年以降、欧米と提携して国内生産を行う方式をとることによって、欧米の音楽が普及しはじめた。

1920年代になってから、米国ではジャズも一般市民にも受け入れられるようになり、たくさんレコーディングされているが、日本で「ジャズ」という言葉が一般的に使われるようになったのは、1928年の二村定一「私の青空」「アラビアの唄」がヒットしたことを受けて、洋楽のカヴァー曲を総じて「ジャズ」と呼ぶようになったことが始まりだそうだ。ちなみに宮沢賢治の詩「岩手軽便鉄道　7月ジャズ」が詠まれたのは1925年、「ジャズ　夏のはなしです」が1926年の事です。賢治は早くからジャズという言葉を知っていたのだ。

天才コルネット奏者ビックス・バイダーベック（1903－1931）の28歳の半生を描いた1990年の伝記映画「ジャズ・ミー・ブルース」の舞台は1920年代。ビックスは15歳の時にオリジナル・ディキシーランド・ジャズ・バンドを聞き魅せられコルネットをはじめ、シカゴに進出してきたニューオリンズ・ジャズに傾倒、ジャズ界に身を投じるようになる。青春を共にしたホーギー・カーマイケルや24年に行われたレコーディング・シーンなども描かれている。ちなみに宮沢賢治が生きた時代は1896年-1933年。37歳で死去。ビックスは、賢治より7年遅く生まれ、2年早く死んだことになる。

次号から連載予定

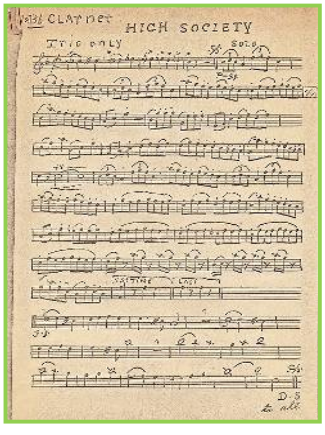
ニューオリンズにジャズの伝説を訪ねて

『ジャズ誕生時代の“化石”』があちこちに

私たちは昔読んだジャズの歴史の本に出てきた初代ジャズ王、バディー・ボールデンの話やジャズメンの想い出話で語られるニューオリンズの街に夢中になった。私たちがニューオリンズに武者修行に行ったのは、そんなジャズ誕生当時の神話のようなお話に大きな憧れがあったこともある。ジャズレコード100年を記念し、次号から、私たちがジャズの故郷に住んだ5年間に“発掘”したジャズ史の“化石”をご紹介したいと思っている。　**（外山喜雄・恵子）**

混血クレオールの楽団としてニューオリンズで一番有名だったジョン・ロビショー(1866～1939)の楽団が残した貴重なバンドの譜面がチュレーン大学に残っている。

クラリネットのソロが有名なジャズの代表曲ハイ・ソサイティーは、マーチのピッコロパートをクラで演奏してすっかり有名になったとの逸話がある。ロビショーの譜面に、1901年の編曲をピッコロに手書きで書きうつした譜面が残っていた！**（写真）** 7月1日の例会で再現演奏する。



ジャズジャパン2015年度復刻・発掘部門賞アルバム・オブ・ザ・イヤー受賞

定年後に買い始めたSP盤は1900枚！これらをもとに復刻盤CD

―――SPレコード・コレクター、山本俊兵さん（会員）インタビュー

1998年以来日本ルイ・アームストロング協会会員として会を支えて下さっている山本俊兵さんは、ルイ・アームストロング他ジャズ黄金時代のSP盤レコードのコレクター。SP盤からの復刻盤CDで世界的なカタログを誇るオーディオパーク（寺田繁社長）が企画、ジャズジャパンの2015年度復刻・発掘部門賞アルバム・オブ・ザ・イヤーをとったサッチモのシリーズ他に数多くの貴重な Okeh レコード等の原版を提供された。山本さんを東大和市のご自宅にお尋ねし、SPレコード収集に寄せ熱い想いを伺った。

（外山喜雄、恵子）

布団をかぶり聴いたラジオから流れるジャズ「11,2 歳のころやったねえ」と関西弁でお話

「わしが最初にジャズに興味を持ったのはラジオから聞こえてくるジャズで、昭和10年生まれやから、11，2歳の時やね」、、、、と強い関西弁でお話して下さった。早くにご両親をなくされ、育ててもらった方への遠慮から、当時の大きなラジオをジャズの音が漏れないように布団をかぶり聴いたという。

最初にプレゼントされた、ビクター・ホット・ジャズ・シリーズのルイ・アームストロング手にする山本さん

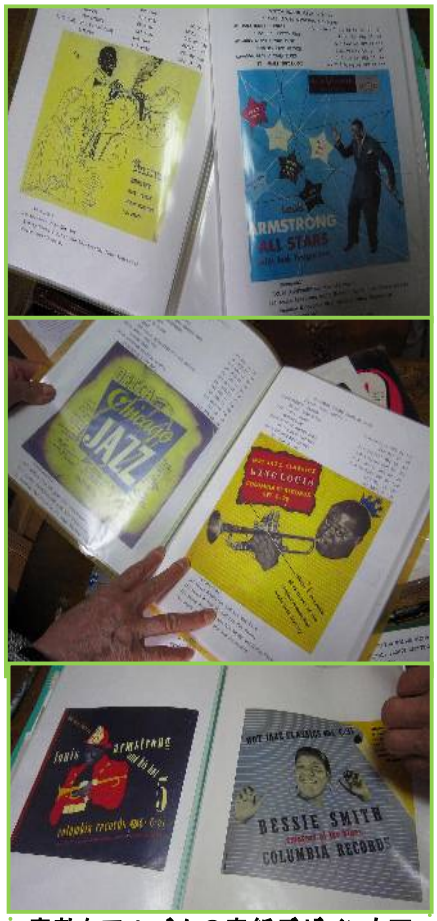
18歳の時、大阪松竹座でルイ・アームストロングの公演があった時はうれしかった。当時入場券800円、、、ちょっと色っぽい体験は500円だったから結構な金額と笑う。「ドラムが乗る台の上にハンカチが仰山おいてあって…」と山本さん。その山が小さくなりなくなった頃コンサートも終わりだったそうだ。「コンサートはピッタリ57分、、、わしゃ変わった性格で時計見て計ってたからわかるんや！」。トロンボーンのトラミー・ヤングが足でスライドを動かして吹いていたのを覚えている。きっとタイガー・ラグだろう。それはそれは楽しい時間を過ごした。

以来1957年頃からは当時の初任給7500円で3枚しか買えなかったような輸入盤LPを買い始めた。最初に買ったレコードはルイの有名なセントルイス・ブルースが入っていたW.C.ハンディー・アルバム。キッド・オリーも買って、良く聴いていた。大阪の“みやこレコード”でLPを買い、高価なので買う前に視聴室で視聴が出来たと言う。「シュワン」と言う当時の洋盤レコードカタログを見ていろいろ手に入れるようにもなった。

その頃の武勇伝。神戸のラジオ関西の末広光男さんが、番組の中でブルースの父、W.C.ハンディーが1953年に自身のボーカル、TP、ギター等で録音したLP（ヘリテイジ盤 Blues Revisited）をかけて、この盤は大阪で私しか持っていないと自慢げに語られたのにカチンと来て、探し回って手に入れ、「これでしょう」とご本人に電話を入れた。いかにも頑固一徹、山本さんらしい逸話だ。

25歳で東京へ南里文雄さんも聴きに行った仲間たちからのSPアルバムがきっかけで…

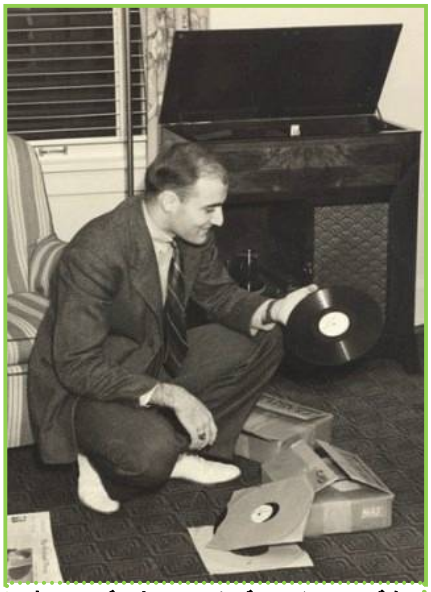
大阪の生まれだが、25歳から東京勤務がほとんど、でも、一生関西弁はこれが俺や！と変えることはなかった。東京ではライブも良く聴きに行って浜口庫之助とアフロクバーナ、南里文雄さんも好きだった。電気関係のお仕事でイラクに2年行かれて、この時は、さすがジャズはなかったという。



素敵なアルバムの表紙デザインも丁寧にクリアファイルに保存されている

SPレコードを集めるようになったのは1996年が最初。その年、定年退職になり職場の部下だった矢澤裕さん（元WJF会員）が仲間3人で、ジャズ好きの山本さんにSPレコード

のアルバムをプレゼントしてくれたのがきっかけ。1940年にビクターから出たホット・ジャズ・シリーズvol.1　ルイ・アームストロング。SP盤4枚のセット・アルバムだった。当時まだSPレコードを集める趣味はなく、「こんなもん貰うても、かけるもんあれへんやないか」と言ったら、他の部下の方がSPプレーヤーもプレゼントしてくれた。



すでにデッカ、コロムビアでシリーズを手掛けていた学生時代のアバキアンさん

アバキアン氏担当のアルバム18種も所蔵 ジャケット写真入りTシャツまで作って贈呈

これがきっかけで収集が始まり、最初にご自身で買ったのがコロムビアのホット・ジャズ・クラシック・シリーズの「ホット・トランペット」。コロムビアの大プロデューサー、ジョージ・アバキアン氏がまだエール大学の学生だった頃、コロムビアで作ったSPアルバム・シリーズだ。SPを何枚かのセットにしてアルバムにするのはクラシックにはあったが、ジャズ界ではアバキアン氏がデッカに提案して発売された「シカゴ・ジャズ」が最初。その後コロムビアに移り、ホット・ジャズ・クラシックスのシリーズ等で数々の名盤を担当、後のジャズのＬＰへの移り変わりでも大きな役割を果たした。

アバキアンさんにはこのTシャツをプレゼント、大喜びでサインまでしていただいた

山本さんの一番好きなSPを訪ねると、アバキアン氏が担当したルイ・アームストロング・ホット5の中の「キング・オブ・ズールー」。山本さんのアバキアン氏への敬意は大変なもので、現在18種のSPアルバムを所蔵、10年ほど前には表紙のデザインをプリントしたTシャツまで作ってしまった！　ニューオリンズのサッチモサマーフェストで、アバキアン氏に何度もお会いする機会があり、山本さん作成のTシャツを贈呈したら大変喜んでくださった。一枚には氏のサインをいただき、今も山本さんのご自宅に飾られている。

写真左のように家中の収納ケースに並ぶ貴重なジャズアルバム。1枚物の Okeh 等貴重な原盤も多数

SPレコード・アルバムの良さは、音楽はもちろん、音質もSPならではの味わいのある音、そして表紙デザインの素晴らしさだという。10インチ盤片面約3分、12インチ盤片面5分のSPレコードは、LPだと片面15分か20分、CDだと60分以上もあるのに比べかけ替えが頻繁で大変。でも、山本さんはそれが楽しくて仕方がない。定年から21年、大変高価なアルバムだが集めてしまった数は、アルバムが257、単品のSPが500、合わせてSP盤にすると1900枚ほどになる。山本さんにとっては可愛い孫か恋人のように壊れやすいSPレコードに接している。今まで割ってしまったレコードはゼロ。「縁があって家に来たんやから、家ではお前を殺したり、傷つけたりせえへんで、、、」と言う気持ち。

1900枚のレコードすべてを3年に1度は聴く 「わしのところへ縁あって来たんやからなあ」

1900枚のレコードは3年に一遍くらいは全部針を通すという。「わしのところへ縁があってきたんやから全部聴く。3週間ほどかかるけどな、ここに座って一人で聴くのはええでえ！！」。正に恋人。しかも、1900回立ったり座ったり、、、健康にもしてくれる「恋人」である。レコードの整理は分厚いファイル13冊にファイリングされ、どのレコードも1分もかからず見つけることが出来る。

もちろん収集家としては、もっと桁違いの方がおられるが、山本さんの愛情には素晴らしいものがある。そんな山本さんの気持ちが通じたのか、オーディオパークの寺田繁さんが2002年アーリージャズをSPレコードからの復刻盤で出す活動を開始した際、寺田繁さん、出口一也さん、柳澤安信さん、瀬谷徹さんのような年季の入った収集家と並んで盤を提供、山本さんもSP盤5人集として名前が並ぶようになった。

オーディオパーク復刻盤シリーズに多数採用 7月1日の例会では1971年当時の音を再現

同社が世界的復刻技術でSP原盤をCD化する画期的なシリーズを開始して15年、現在までに96枚が発売

されている。1920年代を中心とするルイ・アームストロング黄金時代シリーズでは、良い状態の盤が多い山本さんのレコードが多く使われている。特に、第2集は9割がたが山本さんの素材、山本さんにとっては夢のような「恋人たち」のデビューだ。現在も東京で4か所くらいあるSPレコードの手に入る店を廻ってコレクションは増え続けている。週1，2日は愛好家の主催する会でSPを聴いたり、ライブへ行ったり、レコード店を廻って「恋人」探し。私たち外山喜雄とデキシーセインツのライブやコンサートにもお出で下さって、浅草ハブへはほとんど毎回、最多ご来場第1位だ。まず東大和から2時間かけて座間のコレクター大西正則さん(WJF会員)宅でレコード談義、その後また2時間かけて浅草へ、そして夜、西武新宿線の終電で東大和へお帰りになる！　山本さん、いつまでもお元気でコレクションを続けてください！！

浅草ハブで貴重なルイ・アームストロング・ホット 5 の Okeh 盤を手に山本さん（左）と私、外山喜雄

オーディオパークSP復刻盤シリーズ

ルイ・アームストロング第1集　2015年発売

（ジャズジャパン　2015年アルバム・オブ・ザ・イヤー受賞）

- ルイ・アームストロング　デビューから人気者へ　1923～1936
- ルイ・アームストロング　ホット・ファイブとセブン　1925～1928
- ルイ・アームストロング　スタンダード・ナンバーを唄う　1929～1939
- ルイ・アームストロング　デッカ・オーケストラ・セッションズ　1936～1947

ルイ・アームストロング第2集　2016年発売

- ルイ・アームストロング　スタンダード・ナンバーを唄う第2集　1929～1938
- ルイ・アームストロング　ホット・ファイブとセブン第2集　1925～1927
- ルイ・アームストロング　ホット・ファイブとセブン第3集　1927～1928
- ルイ・アームストロング　オーケー、ビクター・オーケストラ・セッションズ　1929～1933

オーディオパークSP復刻盤シリーズには、このほかアーリー・ホワイト・ジャズ、アーリー・ブラック・ジャズその他96種ものCDが出されているほか、日本のプレーヤーも含む幅広いジャンルのCDを発売している。是非オーディオパークホームページを訪問してください。
http://www.audiopark.gr.jp/
CD情報等、オーディオパークへのお問い合わせはこちらへ。
オーディオパーク　寺田繁さん
email:　audio@audiopark.gr.jp
住所:158－0081
東京都世田谷区深沢4－34－18
TEL＆FAX:03－3704－9110

写真は、オーディオパーク寺田さんと7月1日、例会デビューするラッパ型巨大蓄音機。イギリス製EMG、1932年頃の制作。手にしているのはODJB。これもレアな原盤

な,なんだ、このどでかいラッパは!?
寺田さん秘蔵の超レアな巨大蓄音機

これで1917年当時のサウンドを再現！
7月1日の例会でこれを見逃したら、もう2度とこんな機会にお目にかかれません。

7月1日、アテネ・フランセの例会では、山本俊兵さん、佐藤修さん（次ページに「三田評論」寄稿文）にODJBのSP盤をお持ちいただき、寺田繁さんご提供のこのなんとも素晴らしい巨大蓄音機で1917年当時の音を聴くコーナーもあります。乞うご期待！

アルバム・オブ・ザ・イヤー賞

私のルイ・アームストロング観

佐藤修　（元日本レコード協会会長、日本ジャズ音楽協会理事長）

私は昭和十七年生まれなので、小学生時代のレコードといえば落とすと割れるS・Pでした。

父はクラシックが好きで根太（ねだ）が外れる程S・Pを集めていて、母はラテン音楽が好みだったので家庭では音楽と言えば洋楽で、歌謡曲の匂いは全くありませんでした。

中学に入ってポピュラー音楽に関心を持ち始めましたが時代の気分の中でジャズに興味を持ちました。そんな中でルイ・アームストロングに強い魅力を感じました。彼は一九〇一年ニュー・オルリンズ生まれです。ジャズは一九〇〇年代初頭にニュー・オルリンズに誕生しました。ルイがいなくてもジャズは発生したと思いますが、彼のトランペット、ボーカルのテクニックは勿論のこと、それにも増して、彼が持つポピュラリティーに満ちた感性、キャラクターの存在がなければジャズがアメリカのみならず世界のポピュラーな音楽にはならなかったと思います。彼は一九二二年にシカゴへ。二四年にニューヨークに行きました。これにより彼が白人に受け入れられ、ジャズがポピュラー音楽としての広がりを持ったのです。もし彼がN・Oに留まっていたらジャズは黒人による黒人のための音楽、つまりレース・ミュージックに終わっていたと考えられます。ペレス・プラードのマンボ、ザビア・クガートのルンバ、モータウンのR&Bもしかりですが、ポピュラーな広がりとは、白人に受けるということなのです。

ルイは白人に人気を得てポピュラリティーを獲得し、それにより全米を巡る興行が可能になりその上でジャズ大使として世界中に演奏旅行し、全世界にジャズを浸透させました。

ところが私が高校生になった頃、ジョージ・ルイスの存在を知ります。彼は一九〇〇年N・O生まれで紅燈街というジャズの温床が閉鎖された時、シカゴへ行っても食えると考えたアームストロング達が移動した時にN・Oに残った多くのミュージシャンの一人です。四〇年代に入り、ジャズが変化している中で発祥のN・Oジャズを発掘するという運動がおこり、荷上げ人夫をしていたのを発見されました。多くの人達が音楽では食えず、他の仕事に就いていましたが、これらの人達を集めレコーディングをしました。

純粋な高校生のジャズ・ファンはポピュラリティーの価値を評価出来ず、ジャズは黒人の音楽であり、アームストロングはシカゴ、ニューヨークに行って迫害されている黒人の悲しみを忘れて白人に迎合した。一方ジョージ・ルイスはN・Oに残って全く白人の影響を受けずに純粋なN・Oジャズを原形そのままを残していると映ったのです。アームストロングが白人のレコード会社の思惑で白人の象徴であるストリングスをバックにレコーディングをする姿に、売れるためにジャズの魂を売り渡した。あれはジャズとは呼べないと考えました。

大学を卒業すると、そのジョージ・ルイスの原盤を択山持っているリバーサイド・レコードと契約したビクターに入社しました、

営業、宣伝、制作、経営を経験する中で、ポピュラー音楽にとって一番大切なことは、多くの人に受け入れられることで、そのことで多くの人に喜んでもらい、楽しんでもらうことだと思うようになりました。このことに気付いて改めて前に述べたアームストロングの偉大さに気付きました。

アームストロングは自分のバンドにジャズと名付けたことはありません。アームストロングは私が考えたような純粋なジャズを演奏しようとは考えず、如何に人々に受けるかを考えていたのではないかと思う様になりました。

やがて世の中にジャズを芸術視する動き－芸術＝難解からジャズが楽しくなくなり、一時の隆盛から翳りを見せています。

今ではルイ・アームストロング、ジョージ・ルイス共に楽しんでいます。

慶応義塾大学『三田評論』2017年4月号「丘の上」コーナーの「私のルイ・アームストロング観」より転載させていただきました。なお、ワンダフルワールド通信93号に掲載させていただいた、中村宏さんの「私のジャズ遍歴」は、『三田評論』2017年1月号「丘の上」コーナーから転載させていただきました。

銀座の春を彩る「ジャズひな祭り」久しぶりに鈴木孝二さんも加わる

銀座の春を彩る「ジャズひな祭り」が3月5日（日）、東京・西銀座7会場に30数人のミュージシャンが集い、思い思いのバンド編成で開催された。デキシーセインツは今年も外山恵子Jazz‘n Babiesとして参加、恵子姫をリーダに5人囃子（外山喜雄、広津誠、粉川忠憲、藤崎羊一、サバオ渡辺）を従えて熱演した。

出演会場は、例年おなじみのクラブ「シグナス」と新築なったばかりの東急プラザ7F、カフェ＆イベントスペース「HANDS EXPO CAFE」。特にこの2ステージ目の東急プラザには、久しぶりに鈴木孝二さんが特別出演し、恵子さんのバンジョーをフィーチャーした「スワニー河」「バーガンディーストリート・ブルース」で素晴らしい演奏を披露してくれた**(写真上)**。

「外山さんのところに戻ってくると、年下ですけど…お母さんもいるし、まるでうちの帰ってきたような気持になります」と挨拶されていた孝二さん、バックで演奏していた外山さんと粉川さんは何やら目を潤ませていました。**（小泉良夫）**

サー・チャールスさん宅に牧子夫人を訪ねて 生前そのままのお部屋に思い出の品々が…

昨2016年6月16日、98歳で天国へ旅立たれた名ピアニスト、サー・チャールス・トンプソンさん。この度、東京都下にお住いの奥様、牧子トンプソンさんをお尋ねしてきました。生前のまま置かれたグランドピアノの上には、優しい表情のサー・チャールスさんのポートレートと記念の品々、そして素敵なお花**(写真)**。最後の入院の前、もうこれが最後かもしれないから君のために、と奥様に1時間ピアノを弾いて捧げた…そんな音が聞こえてきそうなお部屋でした。

例会、クリスマス・パーティーに奥様とご一緒に10回以上ゲストで出席いただき、WJFとは深い温かい気持ちで繋がって…1997年には素晴らしい共演CDも録音させて頂く機会を得ました。奥様によると、常々『ジャズは楽しむためにあるんだよ。パーカーやガレスピー以後のジャズは難しくなりすぎた』が口癖だったとか。

アメリカで暮らした1990年頃、道でばったりマイルス・デービスに会った時の話をしてくれました。『ジャズ代名詞みたいなマイルスがね、チャールスに会ったらもう、小さくなってしまって！チャールスは、やあ、オマエ元気か？ なんて威張ってるんですよ！マイルスはすっかり謙遜してしまって、“イヤァ～、チャールス、僕がやってることなんか、インチキですよ…”ナンテ！すごいひとなんだなと、見直しました！』。サー・チャールスさん、ありがとうございました。**（外山喜雄・恵子）**

募集中

♪ジャズを愛する皆様
どうか会員になって下さい！！
また皆様のお知り合いの方々に
ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

＝WJF年会費＝

一般会員(General Membership)	¥6,000
学生会員(Student Membership)	¥3,000
賛助会員(Friends of Louis Armstrong)	¥12,000

■会費のお振込み先■
郵便振替　00110-4-415986
ワンダフルワールド・J・F
銀行振込　三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前支店
普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは:WJF事務局
TEL: 047-351-4464
Fax : 047-355-1004
Email:saints@js9.so-net.ne.jp
日本ルイ・アームストロング協会HP
検索エンジン:Yahoo,Google で
＜検索＞ルイ・アームストロング
http://wjf4464.la.coocan.jp/

編集長から

ジャズレコード初吹き込みから今年で100年。WJFはこれを記念して会報特集号と特別シリーズ例会を企画しました。第1回は『ラグタイムからJASSまで』を7月1日（土）アテネフランセにて開催します ▼この会報特集号では、ジャズ初録音のODJBの発売当時の広告も掲載し、録音以前のジャズの状況とジャズ誕生のルーツ、ラグタイムと黒人クレオールの俯瞰、ニューオリンズが生んだジャズ先駆者たち、特別寄稿の佐々木孝夫さんは宮沢賢治とジャズ詩を紹介。SP盤レコード・コレクターの山本俊兵さんのインタビュー記事も濃い内容です ▼そして第1回特別例会で披露されるSPレコードの音を再現する巨大ラッパ型蓄音機（寺田繁さん提供）記事もレア感いっぱいです。この例会でゲストとして登場の佐藤修さんの「私のルイ・アームストロング観」は、“多くの人に受け入れられたルイ・アームストロングの偉大さ”に触れています ▼100年間のうちルイのレコードによるジャズへの貢献は1923～71年、そしてWJFは22年の活動期間です。7月1日、アテネフランセでお会いしましょう！（山）